

『落窪物語』のあこき・三郎君に支えられる女君

——一部の継子物語における童の役割——

富澤 萌 未

論文要旨

本稿では、継子物語の一つとされる『落窪物語』における童の役割について考察をおこなった。二人の童「あこき」と「三郎君」が、財力やしつかりとした後見役を持たない女君を支えていることを確認した。その上で、「あこき」と「三郎君」が、継母北の方によって孤立させられていた女君と外側の世界をつなぎ、積極的に援助したと結論付けた。こうした童が活躍する『落窪物語』のあり方は、『堤中納言物語』の「貝合」など、継子物語の一形式を知る上で重要である。

キーワード 『落窪物語』／あこき／三郎君／童／継子物語

はじめに

平安時代中頃に成立した『うつほ物語』には次のような記述がある。

西の御門より、下り給ひて、右大将は宮の御前へ、左大将は、忍びて、中の君の御方に参りて見給へば、うち破れたる屏風一

具ばかり、夏の帷子の煤けたる几帳一つ二つ立てて、君は、綾搔練の所々破れたる一襲、煤けたる白衣着て、火桶の煤けたるに、火わづかに起こしたるに、台一つ立てて、白き陶鏡たうわんに、御膳、ひめ糲ひめめきて、少し盛りて食きをり。はじかみ薑・漬けたる燕・堅塩かぶらに、御膳かぶらばかりして、夜さりの御膳にもあらず、朝の膳にもあらぬほどに参りたり。御前には、古びたる革蒔絵の御櫛の箱、さやうなる硯箱据えて、櫛の箱、蓋を取り退けて、一日の柑子の壺の残りを取り出でて、ちち乳母懸けて見などす。その娘・孫など、童こにてあり。下仕へ、一人ばかりなむありける。おとど、見巡らして、とばかり物ものたまはず、ただ泣きに、二三の御衣の袖のしとどになりぬまで泣き給ふ。（蔵開・下・五八七〜五八八）^①

藤原兼雅の妻の一人、故式部卿の宮の中の君が、兼雅に忘れられ貧しい生活を送る場面である。傍線部のように、中の君は、粗末な衣装を着て、壊れた屏風や汚れた几帳・古びた丁度品に囲まれて過ごしていた。食事も貴族のものとは思えない粗末なものが示されている。

る。中の君の両親はすでに不在で（蔵開・中・五六七）、夫にも忘れられた中の君が頼ることができるのは、四角で囲ったように、乳母とその娘・孫、雑用を務める使用人一人だけだった。波線で示したように、乳母の娘や孫は、童姿であり、成人の儀式をおこなうこともできない状態だった。

この『うつほ物語』の中の君の描写は、継子物語を考える上でも大いに参考になるのではないか。先にも指摘したが、中の君には有力な後見となる両親がいなかった。もちろん、継子物語の主人公とは違い、すでに結婚している。また、継子物語の場合、両親のどちらかが健在（父のことが多い）であることが多い。しかし、その場合でも、新たに迎えられた継母（継父の場合もある）に疎外されていることが多い。健在であるはずの親も、子と疎遠になってしまっている。いわば、両親がいないのと同じ状況になってしまっているのである。そのような場合、頼れるのはそばに仕えている人々である。中の君の場合、乳母がいた。だが、乳母の娘や孫たちは成人の儀式を挙げることができず、童姿のままである。

童姿のものしかそばに仕えられない状況は、一部の継子物語に見られる。たとえば、『堤中納言物語』に収録されている「貝合」という短編物語がある。この物語は、実の母がいない姫君と、腹違いの姫君が貝の美しさを競っている。腹違いの姫君は大輔の君、侍従の君といった大人の女性たちが仕えているため、各所から美しい貝を集めることができている。母も健在のため、身分が高い人に美し

い貝を依頼しているのだという。一方、継母に疎外される姫君には女童しか仕えていない。彼女には弟もいるが、その弟も、貝合の貝を集めるには一〇歳と幼すぎている。^②結局、垣間見た少将の陰ながらの協力によって、姫君は美しい貝を手に入れることができるのだが、姫君が童に囲まれていることは見逃せない。姫君は、継母や実の父から大人の女性を雇えられていないのだ。このことは、『うつほ物語』の中の君の場合と共通する。中の君には継母はいないが、乳母の娘や孫を成人させるだけの財力を持っていなかった。

このようなことは、『落窪物語』にもいえる。『落窪物語』の主人公と見られる女君^③は、乳母がいなかった。代わりに、あこきと呼ばれる女童が常に寄り添い、女君を援助していた。あこきは、帯刀という男性と結婚していた。また、巻二になり、道頼の邸に迎えられてすぐに、「あこき、大人になりね。いと心およすけためり」^④（巻二一五五）と道頼に言われ、成人する。つまり、あこきはすでに成人しても良い年齢を迎えていたのだが、何らかの理由で成人していなかったといえる。あこきは三の君のもとにも出仕しているため、成人しても問題なかったはずだが、受領を叔母に持つあこきが成人すれば、小間使いのように扱えないという継母北の方の思惑があったのかもしれない。

いずれにしても、『落窪物語』でも、童姿の女性が女君に仕えている。これは、「貝合」の姫君と同様、父や継母から援助を受けていないために、頼れる大人の後見役がいないことを意味する。『う

つほ物語」の中の君の場合、乳母がいたのでまだしも良いが、『落窪物語』の女君には乳母すらいなかった。『落窪物語』には、もう一人、女君を支える童がいる。それは、継母北の方の息子である三郎君である。

『落窪物語』では、本来は零落してしまった象徴である童姿の者が女君に仕えている。中納言家で他に協力する者は、女君に同情した女房の少納言（巻一 九五〜九六）ではなく、まだ小さい三郎君だった。しっかりとした後見や財力のない女君に仕えている女童や、後見役としては幼い童たちが、どのように女君を支え、救助してゆくのが、この物語には描かれている。本稿では、そのような童たちの活躍を見てゆきたい。

一、女童あこきの活躍

『落窪物語』に登場する女君に仕える女童は、「あこき」と表記するものもあれば、「阿漕」「あこぎ」と表記するものもある。本稿では、「あこき」は、年少の者や目下の者を呼ぶ際に用いる「吾子」に童名で用いられる「君」をつけた「吾子君」だと考え、あこきと表記する。⁶⁾

あこきについては、先行研究でも多く論究されてきた。あこきが『落窪物語』の全体を通して活躍する点について、稲賀敬二氏、神尾暢子氏、三谷邦明氏が論じている。稲賀敬二氏は、あこきが『落

窪物語』を通して意思を貫き、女君を助け、復讐を果たし、最後には出世した姿を読み解いている。⁷⁾ 神尾暢子氏は、あこきが虐待と報復、報恩において、女君と一心同体となっており、理想的な女性として描かれる女君の代わりに、あこきが活躍したのだと説く。このように、『落窪物語』は、あこきが盛んに活躍する物語だといえる。三谷邦明氏は、このようなあこきの活躍から、『落窪物語』の読者層があこきと同身分の下級女房だったのではないかと推測する。⁸⁾

また、物語におけるあこきの役割についても、さまざまに論じられてきた。古田正幸氏は、あこきが女童である設定によって、本来童であるべき若さに比べ、あこきが抜きんでた才覚を持つことを示している⁹⁾と論じている。松山典正氏は、女君への求婚が道頼と典葉助で対照的に描かれるのと同様に、道頼との仲を取り持つあこきが母と強いつながりを持ち女君を支える一方で、典葉助との仲を取り持つ継母北の方はあこきと逆の動きをすると指摘している。¹⁰⁾ 三木雅博氏は、主人公を不思議な力で導くことが多い継子物語の中でも、『落窪物語』は現実的な物語として作られているため、その不思議な力の部分にあこきの行動によって置き換えられているのだとする。¹¹⁾ 伊勢光氏は、女君とあこきの分身関係を示した上で、前半は継母北の方から信頼されなくなってしまうあこきが女君とともに救出され、後半は女君の分身として復讐という負の側面を担うと指摘する。¹²⁾

このように、あこきについての先行研究は多く積み重ねられてい

る。しかし、あこきが継母北の方に仕えることによって、それまで女君といた閉鎖的な空間から抜け出し、外界とつながることで、結果として女君が外の世界に出るを手助けしたという部分については先行研究では指摘されてこなかった。⁽¹³⁾ 本稿では、あこきが女君を外の世界に連れ出した人物であったことに注目したい。なお、本稿では、『落窪物語』における童に注目して論じるため、あこきが女童にある時期の活躍に焦点を合わせて論じてゆく。

それでは、あこきの活躍を見てゆこう。あこきは、もともと母君がいたときから仕えていた女童だった。

はかばかしき人もなく、乳母もなかりけり。ただ、親のおはしける時より使ひつけたる童の、されたる女、「後見」とつけて使ひ給ひける、あはれに思ひかはして、片時離れず。

(巻一 一六)

女君には、しっかりと後見をしてくれるような女房や乳母が不在だった。代わりに、母君が生きていたときから仕えていた後見という名の女童が女君を支えていた。女君と後見は、お互いに相手を思い、絶えず一緒にいた。

後見の髪的美しさを見た女君の継母である北の方は、娘の三の君にも後見を仕えさせる。

後見といふ、髪長くをかしげなれば、三の君の方に、ただ召しに召し出づ。後見、いと本意なく悲しと思ひて、「①わが君に仕うまつらむと思ひてこそ、親しき人の迎ふるにもまからざり

つれ。何のよしにか、異君取りはし奉らむ」と泣けば、君、「何か。同じ所に住まむ限りは、同じことと見てむ。②衣などの見苦しかりつるに、なかなかうれしとなむ見る」とのたまふ。げに、いたはり給ふことめでたければ、あはれに心細げにておはするをまもらへ馴らひて、いと心苦しければ、③常に入り居れば、さいなむこと限りなし。落窪の君も、これを、今さへ呼び込め給ふこと腹立たれ給へば、心のどかに物語もせず。④後見といふ名、いと便なしとて、「あこき」とつけ給ふ。

(巻一 一八―一九)

三の君に出仕しなければならなくなった後見は、傍線部①のように嘆く。女君に仕えようとしたからこそ、親しい人が迎えに来てても女君のもとを離れなかったのだという。親しい人とは、後に登場する叔母の和泉殿のことである。後に叔母の和泉殿は「昔の人の御代はりは、あはれに思ひ聞こえて、女子も侍らねば、娘にし奉らむ、身一つはいとやすらかにうちかしづきて据ゑ奉らむと思ひて、さきざきも御迎へすれども、渡り給はぬこそ、恨み聞こゆれ」(巻一五九)と手紙を書いている。後見の母君はすでに母がいなかったが、叔母がおり、何回も迎えに来ていたことがわかる。しかし、後見は、女君のことを思い、その申し出を断っていた。傍線部②の女君の発言からもわかるように、これまで後見は、女君と同じような、みすばらしい衣装を着ていたという。女君は、後見の衣装が見苦しくならないので、かえって嬉しく思うと言っている。実際、三の君

のもとに出仕したあこきは見苦しくない衣装を着ることができ、後に女君の結婚の準備をおこなう際も、自分の衣装を女君に着せることができた(巻一 五二)。だが、傍線部③のように、三の君のもとに出仕した後見は、女君を思うあまりに頻繁に女君のもとを訪れていたため、継母北の方の怒りを買って、女君とすっかり話すこともできなくなってしまった。その上、傍線部④のように、これまで名付けられていた「後見」という名から「あこき」という名に改められてしまう。

こうして、継母北の方はあこきを女君のもとから離し、女君を孤立させようとする。ところが、この継母北の方の行為が、かえって後に女君の助けとなる。三の君のもとに仕えるようになったあこきは、これまでとは異なり、男性の目にも留まるようになる。三の君の婿である蔵人少将に仕える帯刀は、あこきに手紙を贈るようになり、ついに夫として通うようになった(巻一 一九)。帯刀は、左大将の息子である少将道頼の乳母子だった(巻一 二〇)。あこきは、常に女君の辛い境遇を帯刀に語っていたため(巻一 一九～二〇)、帯刀は道頼に女君のことを話す(巻一 二〇)。それによって、道頼は女君に興味を示し、帯刀の手引きのもと、女君のもとを訪れるのだった(巻一 三五～四四)。

このことをあこきは知らされていなかった。だが、あこきが女君のもとを離れず、絶えずそばにいては起こらなかったことである。あこきが三の君に仕え、帯刀を通わせたからこそ、女君は道頼と出

会えた。継母北の方は、あこきが次のように言及するように、女君を邸に閉じ込め、誰にも知られずに孤立させることを目的としていた。

かくて込め据え奉り給ひて、使ひ奉り給はむの心のいと深く
て、あらせ聞こえ給ふにはあらずや (巻一 四七)

右は、少将と関係を結んだ女君が、継母北の方にこのことを知られたらと悩む場面において、あこきが女君にする助言である。あこきは、継母北の方は、落窪の間に女君を閉じ込めて縫物をさせようとしているのだらうと指摘する。この継母北の方の企みは、女君を孤立させるためにあこきを三の君のもとに出させたことで綻びを見せる。あこきが女君との二人の世界から抜け出したことが、結果として女君を外側の世界に連れ出したからである。

あこきが本格的に活躍するのは、結婚二日目、三日目のことである。

さて、あこき、ただ一人して、言ひ合はずべき人もなければ、
心一つを千ぢになして立ち居つつ、①御座所の塵払ひ、そそくりて、屏風・几帳なければ、しつらひなさむ方もなければ、いとわりなけれど、君はものもおぼえで臥し給へるを、御座直さむと引き起こし奉れば、面赤みて、げに苦しげなるまで、御目も泣き腫れ給へり。いとほしうあはれにて、②「御髪掻き下し給へ」と、おとなおとなしう繕へど、「心地悪し」とて、ただ臥しに臥しぬ。この君は、いささか、よき御調度持給へりける、

母君の御物なりけり。鏡などなむ、まめやかにうつくしげなりける。③「これをだにも持給へらざらましかば」と言ひて、掻き拭ひて、枕上に置く。かく、④大人になり、童になり、一人急ぎ暮らし給ひつ。
(巻一 五一)

あこきは頼るべき人もなく、一人で女君を支えなければならなかったため、一人で結婚二日目の準備をする。傍線部①のように、あこきは御座所の塵を払い、道頼を迎える用意をしている。そして、傍線部②のように、泣いている女君の髪を梳かし整えている。女君の髪を繕い梳かすのは、母君や祖母君、夫など、女君を庇護しようとする者がおこなう動作である。¹⁵本来、女童がする動作ではないが、あこきはこの場面では「おとなおとなし」く振る舞っている。あこきは、乳母や頼るべき女房がいない女君の庇護者として行動している。さらに、傍線部③のように、女君の母君から伝えられた道具を磨き、準備を進める。あこきは傍線部④のように、大人として振る舞ったり、童として振る舞ったり、一人で複数の人の仕事をしつつ、結婚の準備をしたのだ。その後、先にも指摘したように、三の君から与えられた自身の衣装を女君に着せ、三の君の裳着の際に使われた薰物を薫き染めた。

「薰物は、この御裳着に賜はせたりしも、夢ばかりづつ置きて侍り」とて、いと香ばしう薫き匂はす。
(巻一 五二)

三の君のもとにあったものを流用するといった行為は、他にも見られる。

御手水参らむと求めありく。御方には、いづくの半挿・盥かあらむ、三の御方のを取り持て来て、御前に参らむとて、頭搔い下しなどして居たり。
(巻一 五六)

あこきは、御手水のために、三の君のもとから半挿や盥などといった水を入れる容器を持って来ている。また、四日目の朝に、石山寺から戻って来た継母北の方たちが食べた精進落としての料理も、御厨子所で調達してもいる(巻一 七四)。こうして、あこきは、継母北の方の思惑とは裏腹に、継母北の方によって三の君の女童になったことを利用し、女君を助けている。

この後、あこきは、もともと自分を娘として迎え入れてくれるはずだった叔母の和泉殿に依頼し、二日目の几帳、三日目の三日夜の餅や半挿や盥、餅以外の食べ物も調達する(巻一 五二～五三、五九～六一)。和泉殿という保護者がいるにもかかわらず、あこきはこれまで和泉殿に頼り切っていなかった。¹⁶しかし、女君の結婚のために、これまで依存してこなかった叔母の力を借りるのである。

先にあこきが大人として女君の髪の世話をする一方で、女童としての行動を取ること、女君の手助けをしたと説明した。あこきは、女君を大人のように守りながらも、時には女童として、大人でいえば下仕えがするように複数の場所を動き回り、食べ物や水を汲む道具の調達をした。そのように、あこきは、時には三の君の女童として、時には受領の姪として、女君を助けている。複数の動き回ることのできる女童としての特性を使いつつ、あこきは女君を支えている

るのだ。

二、三郎君の活躍

しかし、こうしたあこきの動きは、継母北の方によって封じられてしまう。継母北の方は、身分が高いと思われる高い男性が女君と会っていることを知った。そして、女君の父である中納言に対して、女君が帯刀と通わせていると嘘をつき、物置小屋のような部屋に閉じ込めてしまうよう誘導する（巻一 一〇七〜一〇九）。あこきは、それに対してなすすべもなく「足摺りして泣かるる心地」（巻一

一一〇）になる。物置小屋のような部屋に閉じ込められた女君は、せめてあこきに会いたいと願うが（巻一 一一二）、継母北の方もあこきを警戒していて会うことはできない（巻一 一一四）。それによって、あこきはますます継母北の方や中納言への恨みを募らせてゆく（巻一 一一五）。道頼が訪れ、手紙を置いて行くと、あこきは皆が寝静まったときに、手紙を持って女君のもとを訪れ（巻一 一一七〜一一八）、その後も道頼の手紙を届けに行く。

北の方、ふと驚きて、「この部屋の方に物の足音するは、なぜ」と言へば、あこき、泣く泣く、「疾くまかりなむ」と申せば、

（巻一 一一九）

ところが、継母北の方が音を聞きつけたために、傍線部のように、あこきは早く帰らなければ、と言って、その場を去らざるを得ない。

その状況を聞いた道頼はなんとかして女君を救い出そうと決意する（巻一 一二〇）。

ついにあこきでさえ女君に直接会えなくなってしまった。そうした状況を打開したが、女君の弟の三郎君である。

おほかたの心ざま聡くて、琴なども、習はす人あらば、いとよくしつべけれど、誰かは教へむ。母君の、六つ七つばかりにておはしけるに習はし置い給ひけるままに、箏の琴をよにをかしく弾き給ひければ、向かひ腹の三郎君、十ばかりなるに、琴心に入れたりとて、「これに習はせ」と北の方のたまへば、時々教ふ。（巻一 一七）

故母君から箏の琴を習っていた女君は箏の琴の名手だった。そのため、継母北の方腹の三郎君に、女君は箏の琴を教えていた。三郎君は、継母北の方の息子であり、女君の弟である。他の継母北の方の子はみな、女君に興味がなく冷淡な態度だったが（巻一 九五〜九六）、三郎君だけは女君から箏の琴を習っていたために、女君と親しい間柄だった。女君は、落窪の間に閉じ込められていたため、あこきや継母北の方以外、ほぼ誰とも交流することはなかったが、実は三郎君だけは箏の琴の練習を通して女君と交流していた。

先に確認したように、あこきは継母北の方に警戒され、なかなか女君と会えない状況だった。そこで、あこきは、三郎君に協力を依頼する。

あこき、いかで物参らむ、いかに御心地悪しからむと思ひまは

して、強飯を、さりげなく構へて、いかでと思へど、せむ方な
 ければ、①この語らふ小さき子に、「かの君の、かくておはし
 ますをば、いかが思す。いとほしう思すや」と言へば、「いか
 がは」と言ふ。「さらば、人に気色見せて、これ、御文奉るわ
 ざしたまへ」と言へば、「いで」と取りて、あやにくに、か
 の部屋に行きて、②「これ、開けむ、開けむ。いかで、いかで」
 と言へば、北の方、いみじくさいなみて、「何しに開くべきぞ」
 とのたまへば、「沓を、これに置いて、取らむ」とののしりて、
 打ちこほめかしてののしれば、③おとど、乙子にて愛しうし給
 へば、「おごり歩かむと思ふにこそあらめ。早う開かせ給へ」
 とのたまへど、いみじくのたまひて、「いましばしありて、開
 けむついでに」とのたまふに、④おそばへて、「吾押し毀ちて
 む」と腹立ちののしれば、おとど、手づから、いまして開けて、
 入り給へれば、沓も取らで、つい屈まりて、⑤さし取らせて、
 「あやし。なかりける」と出てぬれば、「まさにさかしきこと
 せむや」とて、走り、打ちたまふ。(巻一 一一〇〜一一二)
 あこきと三郎君との関係はこれまで描かれていないが、ここでは傍
 線部①に「語らふ」とあり、普段から三郎君と定期的に話していた
 ことがわかる。おそらく三郎君が女君に箏の琴を習ったときに知り
 合い、あこきが三の君に仕えた後も話をしていたのだろう。傍線部
 ①のように、あこきは、女君を慕っていた三郎君に対して状況を説
 明し、手紙を女君に届けて欲しいと頼む。三郎君も快く承諾し、す

ぐに女君のいる部屋に向かう。部屋に着いた三郎君は、傍線部②の
 ように、部屋の戸を開けて欲しいと騒ぐ。それを継母北の方が聞き
 つけ、やって来る。三郎君は、めげずに部屋の中に置いている沓を
 取りに行きたいと大騒ぎする。それを聞きつけた中納言は、傍線部
 ③のように、三郎君を末子としてかわいがっていたため、沓を履い
 て自慢げに歩きたいのだから早く開けてやれと言う。しかし、
 継母北の方は、もう少し経ったら開けようと警戒を緩めない。さら
 に、傍線部④のように、三郎君が、それではこの扉を壊してしまお
 うと騒ぐので、中納言は自分の手で女君の部屋の扉を開ける。三郎
 君はすかさず入り、傍線部⑤のように、女君に手紙を渡し、おかし
 いぞ、沓はなかったと言いながら外に出て来る。それを見ていた継
 母北の方は、何かごさかしいことをしたのではないかと三郎君を追
 いかけて叩く。

この一連の三郎君の行動は、三郎君が女君と近い関係にいたこ
 とから生じている。継母北の方は、先に指摘したように、女君を隔
 離し、人々と触れ合うことをさせずに女君を働かせるという虐待を
 おこなっていた。ところが、そのような女君を働かせているもの
 一つである楽器の教習によって、女君は三郎君と出会い、親しい関
 係を築いた。ここでも継母北の方の企みは失敗に終わっている。

また、三郎君は駄々をこね、大騒ぎするという子どもにしかでき
 ない行為をすることで手紙を渡すことに成功している。これは、あ
 たかもマンガ『名探偵コナン』において、大人の頭脳を持つ江戸川

コナンのように、三郎君が賢いからこそできたことだろう。三郎君は継母北の方をいさめることができるほど、賢い童だった。

童なる子の言ふやう、「すべて、上の悪しくし給へるぞ。何しに、部屋に込め給ひて、かくをこなる者に逢はせむとし給ひしぞ。いかにわびしく思しけむ。御娘ども多く、まららも行く先侍れば、行き会ひ来会ひ、聞こえ触るることもこそあれ。いみじきことなりや」と、およずけ言へば、北の方「すやつは、いづち行くとも、よくありなむや。行き会ふとも、我らが子ども、いかがせむ」といらへ給ふ。
(巻二 一五四)

女君が失踪した後、中納言邸は大騒ぎになった。このような中、三郎君は、女君が失踪したのは、継母北の方が女君を虐待したからだと冷静に判断している。そして、継母北の方の子である自分たちは、今後女君に会って話をする機会があるだろうと大人びた態度で母をいさめている。こういった賢い童だったからこそ、三郎君は、咄嗟に沓を置いてきたという嘘をつくこともできた。また、大騒ぎをすれば、日頃から自分に甘い父の中納言が何とかしてくれるだろうと考えることもできた。また、童だからこそ大人では入ることができない場所に侵入することができ、手紙を無事に渡すことができた。三郎君は、巻二でも活躍する。三郎君は、その後の様子を問う道頼の手紙も女君に届けている。

あこき、部屋の戸開きたりと見て、例の、三郎君呼びて、「いとうれしくのたまひしかばなむ。これ、北の方の見給はざらむ

間に、奉り給へ。ゆめゆめ、気色見え奉り給ふな」と言へば、「よかなり」と取りつ。行きて、傍らに居て、笛取りて見など遊び居て、衣の下にさし入れつ。
(巻二 一二七)

三の君の夫である藏人少将の笛の袋を、裁縫の上手な女君に縫わせるために、継母北の方は部屋の戸を開ける。それを見たあこきは三郎君に道頼の手紙を託した。三郎君は、あこきの期待に応え、傍線部のように、笛で遊んでいるふりをしながら、女君のいる部屋に入り、手紙をそっとさし入れる。先の例と同様、三郎君は、童だからこそ女君のそばまで行くことができた。

これまであこきが女君と外の世界の仲介をおこなってきた。だが、女君に身分が高そうな男性が通っていると継母北の方知ってからは、女君はさらに物置小屋のような部屋に閉じ込められてしまう。あこきも継母北の方から警戒され、なかなかそこに忍び込むことはできなかつた。そのあこきの代わりに、女君と外の世界をつなぐ存在として、女君に箏の琴を習っていた三郎君が現れる。三郎君は、中納言の末子でかわいがられていることを自覚しており、とっさに嘘をつくことができる賢さがあつた。三郎君の賢さゆえ、また童だからこそ自由に移動できることで、道頼の手紙は無事に女君のもとに届いた。あこきと同様、三郎君も、女君を孤立させ働かせたい継母北の方の思惑とは反対に動く童だったといえよう。

おわりに

本稿で繰り返し指摘したように、継母北の方は、女君に生活の援助を与えず、さらには孤立させるといふ虐待をおこなっていた。しかし、そうした継母北の方の思惑は、図らずも裏目に出ってしまった⁽¹⁾。継母北の方は嫌がらせて、あこきは三の君のもとに仕えることになった。あこきは、三の君のもとに仕えることで、帯刀と出会う。そして、帯刀から女君のことが道頼に知られることとなる。また、あこきは三の君のもとに仕えていたために、女君を助ける道具や衣装を手に入れることができた。継母北の方の思惑とは異なり、あこきは外の世界と女君をつなぐ仲介者になっていった。

三郎君の場合も同様である。継母北の方は、女君を孤立させようとしながらも、女君の労働力を搾取していた。息子に箏の琴を教えさせることもその一つである。だが、継母北の方の思惑に反し、三郎君と女君が親しくなったために、三郎君は女君の手助けをする。三郎君も、あこきと同様、女君が閉じ込められた物置小屋のような部屋と外界をつなぐ仲介者となった。

はじめに言及した通り、『落窪物語』では、本来は零落してしまっただ象徴である童姿の者が女君に仕えている。また、一見頼りない弟の童も女君と親しい関係にいた。一見すると後見役として頼りない女童や弟の童は、継母北の方によって孤立させられていた女君と外

側の世界をつなぎ、積極的に援助した。『落窪物語』は、財力を持たない女君が童たちによって支えられる物語を見事に描き出したといえる。

【付記】

本稿は、二〇一八年度「学習院大学人文科学研究者若手研究助成」による研究成果の一部である。研究助成をしてくださった学習院大学人文科学研究所に深くお礼申し上げます。また、下記の富澤萌未（二〇二三・三）「童」への名付け、「犬」への名付け（『物語研究』第二三号、pp.63-70）の論文は、二〇一九年度「学習院大学人文科学研究者若手研究助成」による研究成果の一部である。当該論文に規定通りに記載すべきところであったが記載が漏れたのでここに明記することとする。関係各位に感謝申し上げますとともに記載漏れをお詫び申し上げます。

注

- (1) 『うつほ物語』の引用は、室城秀之『うつほ物語 全 改訂版』（おうふう 二〇〇一）に拠って巻名とページ数を付し、適宜傍線を付した。なお、異同は河野多麻『宇津保物語』(岩波書店)（日本古典文学大系）一九五九―一九六二の校異を参照したが、大きく解釈が変わる異同はなかった。
- (2) 姫君には同腹の姉もいるようだが、最初に頼っているのが若君であることを考えると、同じ邸に住んでいない可能性がある。
- (3) 『落窪物語』の主人公である女君は、継母の虐待のために姫君と呼ばれることはなく、「落窪の君」あるいは「女君」と呼ばれる。しかし、「落窪の君」は蔑称であるため、本稿では女君と表記する。

- (4) 『落窪物語』の引用は、室城秀之訳注『新版 落窪物語(上)』(角川書店 二〇〇四)〔角川ソフィア文庫〕に拠って巻名とページ数を付し、適宜傍線を付した。なお、柿本奨『落窪物語注釈』(笠間注釈叢刊) 笠間書院 一九九二)を参照したところ、本稿の解釈が大きく変わる異同はなかった。
- (5) 少納言が女君を助けることができなかった理由については、少納言自身が「この年ごろ、御心ばへも見参らするに、仕まつらまほしう侍れど、世の中のうたてわづらはしう侍れば、慎ましうてなむ、人知れぬ宮仕へも、え仕うまつらぬ」(巻一 九五)と言及している。女君に仕えたいが、人目を憚って仕えることができないという。
- (6) 蟹江希世子「童名考」物語における表現性をめぐって―『表現研究』八二・二〇〇五・一〇)参照。『後撰和歌集』(巻七・秋下・四二六)や『うつほ物語』にも女童のあこきが登場する。
- (7) 稲賀敬二「女性が意思を貫く時―『落窪物語』の主従、姫君とあこき―」(『國文學 解釈と教材の研究』二三・四 一九七八・三)
- (8) 三谷邦明「落窪物語の方法―読者と享受あるいは表現と構造―」(『物語文学の方法Ⅰ』有精堂 一九八九 初出は一九六九)
- (9) 古田正幸「大人」と「童」との境界―『落窪物語』「あこき」を中心に―(『平安物語における侍女の研究』笠間書院 二〇一四 初出は二〇一二)
- (10) 松山典正『落窪物語』の婚姻譚―「隣の爺譚」から見るあこきの役割』(『物語研究』一九 二〇一九・三)
- (11) 三木雅博「(継子いじめ)の物語と中国文学―『うつほ』忠こそ・落窪・住吉の成立を考えるために」(『國文學 解釈と教材の研究』五〇・四 二〇〇五・四)
- (12) 伊勢光『落窪物語』あこきの役割―もう一人の「女主人公」として」(『夜の寝覚』から読む物語文学史』新典社 二〇二〇)。前半があこきの救出ともなるという点は、注(14)で指摘したことも通じるが、伊勢氏は、あくまで落窪君の脱出の補助を疑われた後にあこきが置かされる立場からの脱出を指摘している。
- (13) 注(12)論文において、伊勢氏は、あこきと帯刀の結婚を契機にして女君と道頼の結婚が成立したと指摘している。本稿では、三の君に仕えていたからこそ、あこきが女君を救うことができた点にもあることを詳しく論じる。
- (14) 注(10)論文において、松山氏は、このあこきの孤児としての側面に注目し、「あこき自身の不安定な立場は同時に、自らもいじめを受ける可能性を内包しつつ、女君同様に実母以外の人間に養育される可能性を持つ」と言及し、「母の不在という共通点を介して女君と絆を持ちながら、自分の意思を持って側にいることを選んだのではないだろうか」と論じる。母君に仕えていた女房の一人にあこきの母がいたが亡くなってしまったのか、もともと孤児だったのかは不明である。『源氏物語』「葵」巻に登場する「あてき」のように、親がもともといなかったのかもしれない。あてきは、「とりわきてらうたくしたまひし小さき童の、親どももなくいと心細げに思へる」(引用は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『源氏物語』小学館 一九九五〔新編日本古典文学全集〕葵②六〇)とされている。また、注(6)で指摘したように、『うつほ物語』にも「あこき」という女童が登場する。この「あこき」の姉の兵衛の君は、在原忠保が親代わりとなっており、あくまで忠保は後見役だった可能性もあるが、兵衛の君姉妹(これはたという弟もいる)には有力な後ろ盾となる親がいなかったことが考えられる。有力な後見役としての親がいな童が出仕・活躍することは、当時多くあったのだと推測できる。この点につ

いては、拙稿「女童・舞を舞う子ども」(『うつほ物語——子ども流離譚』翰林書房 二〇二二)にて詳しく論じた。あこきが親もなく、叔母にも引き取られずに、自身の活躍によって最終的に出世してゆく姿は、親がいままま不遇になる継子物語を考える点でも重要である。

- (15) 拙稿「『うつほ物語』国譲・上」巻における袖君の引き取りと「髪」(室城秀之編『言葉から読む平安文学』武蔵野書院 二〇二四年三月刊行予定)において、髪を触り管理するのは、母や夫など、女君を庇護しようとする者だと論じた。祖母君とするのは、「若紫」巻における尼君のことを指す(阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『源氏物語』小学館 一九九四〔新編日本古典文学全集〕若紫① 二〇八を参照)。

- (16) 「折々は、あやしきことなれど、とみにてなむ」(巻一 二三)とある通り、機会があるごとに叔母に頼みごとをしていたようであるが、叔母の返事には「音づれ給はぬをこそ、いと心憂く思ひ給ふれ」(巻一 五三)とあり、三日目の夜もあこきからの依頼を叔母が非常に喜んでいない姪が珍しく頼みごとをしてきたからこそ、叔母の和泉殿は喜んで依頼されたものよりも多い贈り物をしたのだろう。

- (17) 継母北の方は、あこきの髪的美しさを見て三の君のもとに出仕させた。また、女君に対して、三郎君に箏の琴を教えるよう言いつけたのも女君の箏の琴の才能ゆきである。継母北の方は、女君を孤立させる思惑があったが、その思惑は女君とあこきの才によって覆されてゆくとも捉えられる。

ENGLISH SUMMARY
 Stepdaurer Supported by Akoki and Saburogimi
 in *Ochikubo Monogatari*: The Role of Children
 in Some Stepchildren Stories.
 TOMIZAWA Moemi

This study discusses the roles of children in *Ochikubo Monogatari*, a tale of a stepmother's ill-treatment of her stepdaughter. The study confirms that the two children, Akoki and Saburogimi, supported the stepdaughter, who had neither financial resources nor an influential guardian. Furthermore, the two children actively supported the stepdaughter, who had been isolated by her stepmother Kitamokata, by connecting her to the outside world. The children's active role in *Ochikubo Monogatari* is important for understanding a form of stepchildren stories such as *Kainawase* in *Tsutsumi Chunagon Monogatari*.
 Key Words: *Ochikubo Monogatari*, Akoki, Saburogimi, Children, Stepchildren Stories